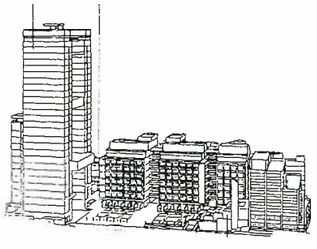
法政大学市ヶ谷校舎 53・55・58年館

——保存か取り壊しか——

お濠越しにみる北側からの景観 -photo：K.T.

50年代の戦後近代建築の存続の危機が次から次へと伝えられる。 神奈川県下の鎌倉の県立美術館(坂倉準三設計)，神奈川県立図書館・音楽堂(前川国男設計)については，すでに先月号，先々月号でこの欄で採りあげてきた．いずれも築後40年を超えて生きつづけてきたものの老朽化が甚だしくと伝えられ，存続して使用し続けることが困難であり，建て替えは止むをえないと報じられる。 はじめから保存再生のための努力がないまま，取り壊した跡地の新築を想い描くに急である点，バブル崩壊後もなおスクラップ・アンド・ビルドのフロー経済のイデオロギーの根強さを思い知らされる。 坂倉の作品，前川の作品，いずれ劣らぬ50年代モダニズムの傑作であり，今後も数10年にわたって生き続けることが切に望まれている。 ここにもうひとつ，これは大江宏が52年から58年にわたって作りあげた東京千代田区の法政大学市ヶ谷キャンパスが再開発によってほぼ全面的に建て替えられる，という問題が浮上してきた．

「市ヶ谷再開発計画」である。 計画の基本は山下設計の担当である。 去る1月25日付の建設通信によれば，工事は2期に分けられ，Ⅰ期では地下4階地上27階建ての研究棟が建設される。 上層部にラウンジ，会議室，中層部にメディアセンター，ゼミ室，実験室などの研究施設，地下に食堂，書庫，キャンパス全体のエネルギーセンターが配置される．



Ⅰ期計画の終了後，地下1階地上9階建ての講義室棟と800人収容のホール棟を含むⅡ期計画の着手にすすむ。 地下に食堂・売店を設け，地上部に事務室，会議室，教室などが入ることになる．

市ヶ谷キャンパスは，ＪＲ中央，総武線飯田橋―市ヶ谷駅のほぼ中間路線沿いにあり，大江宏設計になる53年館や55・58年館を軸に構成されたキャンパスは北側の外濠公園と一体に溶け合って素晴らしい風景を形成している．これもまた50年代モダニズムのなかでも屈指の名作なのである．

この再開発計画に対しては学生諸団体の疑念も根強く，学内の合意も必ずしも完全に得られていないようである。 同校の教授で建築家の河原一郎は大江宏設計の53・55・58年館を残して再開発する代案を提出していると聞く。 その推移を注意深く見守りたい．(K.T.)

法政大学 校舎改造問題

——青春の火を消すな——

浜口隆一

近頃，法政大学の校舎改造について，いろいろと耳にする。 同学園に無縁の筆者ではあるが，“建築評論”を業とする者として，またあの校舎の竣工以来，その魅力にひかれ続けてきた者として，どうしても無関心ではいられないのである．

序でに申し添えさせていただくと，私は設計者，今は故人の大江宏と東大建築学科の同期生として，机をならべて製図を描いたりした旧い友人である。 しかし，この一文はそうした個人的な縁故といったもので書いているわけではない。 あの校舎そのものが，日本の近代建築史において，きわめて重要な「作品」であると深く信じているからである．

現在の状況

実は，このところ7年ほど前から静岡県掛川というまちに住んで，東京を離れているので，あの建物群ともご無沙汰していた。 それで先日，改めて東京に行って，しっかりと対面してきた。 JR飯田橋駅で降りて，歩いて近づいていった。 言ってみれば，久し振りに老いた恋人に会うような心境で，ややためらいがちの気持ちである。 新緑の茂みを透して見え隠れしながら，少しづつ現れてくる姿は，いいじゃないか……昔懐しの映画のシーンを眺めるような趣で，ウットリしたのだが，本当に近づいて，すべてが露になってみると，壁面のシミや汚れが目に立つ。 やはり年月が経ったのだな，という思いだった．

しかし，同時に，この程度の傷みで，修理することも考えずに，スクラップとして壊して，別のものを建てようなどと考えるのは，一体どういうことだと怪しまざるをえなかった．

痛ましい53年棟

尤も，この正面の棟（55～58年）は，まだいい方で，西面する大学院棟（53年）は，もっと酷い。 この棟は，日本で最初のカーテン・ウォール総ガラス面の一つであって，経験不足も絡んで，始めから問題を孕んでいたようである。 特に問題なのは方位に関わるもので，真西に向いているため，太陽の光と熱をまともに受けることであった。 当時は空気調節（エアーコン）が充分に強力でないために，盛夏の候は，室内温度などひどいことになった。 遮熱・遮光の装置（ルーバー）を取りつけなければいけなかったのだが，経費等の関係で，それができなかったと聞いている．

今，その西面に廻ってみると，当然とはいえ，酷いことになっている。 これこそ，緊急になんとかしなければ，本当に駄目になってしまう。 実は，あるいはわざと見殺しにしているのかも知れない。 とすれば，局外者とすれば，何をか言わんやということにもなるが，よく考えてみれば遮熱装置のないことに，直接の原因があるのだから，更めてしっかりとルーバーを取りつけ，空調の性能をアップすれば，充分に回復できるとおもわれる．それを敢えてしないのは，言うまでもなく「経済性」の問題だろう．

ここで私は強く言いたいのだが，建築というものは，単に「技術と経済の箱」ではない。 たしかに「箱」ではあるが，それ以上のものでもある。 詳しく言えば，そうでない場合もある．それは，その建築が「名作」でないときである。 「箱」の内外，つまり「建築空間」が，そこに集う人間たちの「心」に深い感銘を与えたり，あるいは鼓舞したりする「力」があるかどうかに関わる。 誤解を恐れずに，わかり易い言葉を使えば，その建築空間が人間にとって，美味（おいし）いかどうかだということである．

これらについて抽象的な議論をする前に，私自身の書いたもので恐縮だが，40年前，この建物ができた当時，雑誌『国際建築』1953.8にのせた一文がある。 少し長いが引用させていただき，それに続いて論じてゆくことにしたい．

> 去年の暮（1952年つまり今から42年昔——筆者註），よく晴れた日，私は竣工に近い法政大学大学院新校舎を見にゆくべく市ヶ谷付近をタキシーで走っていた。 外濠に沿って行く手に高く，明るい青緑色の全面ガラスのファサードが冬の陽を一杯に浴びながら，突然現われてきた。 実は，それまで新しい建物がどんなデザインか知らなかったので，この大きな全面ガラス壁の出現にはドキッとさせられた。 当時，私は日本で，こんな巨きなガラス壁面を見たことがなかった．
> 多少興奮したとみえて，私は一番身近にいた人である運転手に話しかけてしまった．
> 「あそこに見えるガラス張りの建物，あれですよ．」 運転手は眼をあげて，やはり驚いたように声をあげた．
> 「凄くモダンな建物ですな。 あんなのが，出来たとは，ちっとも知らなかった。 あれが大学ですか．」
> 「どうですか，あんなの好きですか．」
> 「好きです。 いいですね．」
> 私は，こんな会話を交わしながらも，ドンドン近づいてくる建物に眼を据えていた。 濠を渡ると，一階がピロッティで吹放しになっているのが見え，車はカーヴする道を昇って，太い柱（ピロッティ）の間の玄関へ滑りこんだ．

法政大学の新校舎の第一印象は私にとって素晴らしいものだった．しかし，今になって考えてみると，あの時，私が体験したのは冬の晴れた日だった。 この建物が欠点を露呈したのは盛夏の日光の下でである。 ちゃんとルーバーさえ付けておけば……と今更のように悔まれるが，一体誰の責任だったのか。 関係者のすべ

て……ということかも知れないが，あるいは，もう亡くなってしまった建築家・大江宏その人だったのかも知れない．　しかし，それにしても，まだこの建物は「死んで」はいない．　柱は充分太いし，コンクリートの材質もしっかりしている．　構造的には充分な耐力があるようだ．　今，ピロッテイの空間に立っていると，やはり爽やかな風が吹いてくる．　この爽やかな空間感覚は何から来るのだろうか．

“評論家風”な言い方をすれば，これは当時，世界の近代建築の先頭を走っていたル・コルビュジエの名作，パリに建った「スイス学生会館」にもとがあるわけだが，とにかくその「核心」を的確に摑みとって，最初に日本に移植したのが，建築家・大江宏であり，彼の知性と洗練された感覚だった．

そうした先端的だったものだけに，今日の眼から見れば，若気の至りといった非難もしたくなる．　しかし，その若気の故に，スカッと大胆なところがあり，今でもある迫力をみなぎっている．

この53年棟は，引き続いて大江が設計した法政大学の校舎群（55～58年棟）の有機的な全体計画の一部である．　その全体計画は，市ケ谷の濠の上の広大な台地の敷地に，地形的・地勢的にも，実に見事に納まっている．　それは現地で観察するのが一番だが，配置図面で見ても納得がゆく．

ヒューマン・メーター

校舎群の全体計画がよく練られているので，大学の内部を歩き廻るのは，なかなか楽しかった．　この歩き廻って楽しいということは，その作品がすぐれているかどうかについて，かなり的確に啓示してくれる．　言わば「ヒューマン・メーター」(人間感性計測器とでも言ったらいいか)」で計るわけである．　因みに，このヒューマン・メーターという考え方は，近年イギリスの照明工学等の方面で現れてきたものだと聞いている．　建築もそうだが，所詮すべての文明は，人間が，人間のために，人間の手によって造るものである以上，とどのつまりは人間の「心あるいは感性」が決め手になるというわけだ．　それは「主観的」なものだから，バラつきがないとは言えないが，実はそれほどバラつかない．ということは，私も自分の永年の経験から，言わば「主観的」に確信している．　ある建築作品がすぐれたものであるかどうか判断するのは，ひどく難しいようだが，本当は誰にでも分かるのである．　その理由は，どうやら，その建物の内外を歩き廻るという「心身一体的な方法」にあるのではないかと私は考えている．つまり歩き廻らなければ駄目で，歩き廻るとわかってくるのである．

法政大学の空間

というようなわけで，私は大学の校舎群の内部を渡り歩くようにして，歩き廻った．　いろいろと感じるところはあったが，中でも圧巻だったのは58年棟の一階にある広い学生ホールの「空間」だった．　男女多勢の学生たちが広い部屋の中にバラバラに集まっている．　ビラやポスターの類が，やたらに張ってある．　いろいろな部活動などの打ち合わせ，その他，いろいろと学生らしいことを思い思いにやり合っているのだろう．　言ってみれば，ビールは飲まないビアホールのようなものである．　喧燥といえば，喧燥だが，自由に振舞っているのが楽しそうである．　眺めている私も決して不愉快ではなく，それどころか私まで若返った気持ちで，雰囲気を楽しんだ．

勿論，こうした自由な雰囲気が醸されるのは，現代の学生気質によるものだろう．　しかし，それだけではなく，こうした空間を意図的に提供した建築家と大学当局の，いわば話のわかる大人的な配慮があったからだともおもう．　大きな声を出したり，ビラやポスターをやたらに張ったりしても，それらを柔らかく包みこむ何かがある．　空間のスケールも，室内の素材も，形の細部も，すべて大らかに選ばれている．　「自由と若さ」を愛することを知っている「心」が底にあるように思われた．

聞くところによると，もともと法政大学の創設当時（明治初期）の目標は，「フランス法」を日本に本格的に植えることにあったという．　いうまでもなくフランス法の精神は自由・平等・博愛を掲げるもので，フランス革命の土台を支えるものである．日本では，その後，「帝国建設」への国論の高まりとともに，ドイツ法の移植に主流が変わり，法政大学の建学精神は，影が淡くなったが，それでも，その伝統は脈々と活きてきたに違いない．この学生ホールの自由で若々しい雰囲気は，まさにその伝統に連なるものではないのか．　もし，そうだとしたら，私は法政大学の学生や当局の方々に心から脱帽したい．　と同時に，設計者・大江宏が彼自身の生い立ちからして貴族的ではあったが，フランス的な「精神の自由」に憧れていた男だったことを憶いだす．

ファサードの印象

ファサードといえば，建築のいわば「顔」だから，なんとしても大切なものである．　その点，法政大学の校舎では特に主要な役割を果してきた．　戦後の法政大学の「イメージ」は，このファサードによって，どれだけ高められたことか．

外濠の崖の上のさらに可なり高い位置に，百数十米×三十米という巨大な壁面が伸びているのだから，否が応でも眼につく．壮観という言葉がピッタリする．　建築家として当然，壁面のデザインには凝りに凝ったとおもう．　結果としては大いに成功した．　カーテン・ウォール的な構法だから，凸凹なし，陰影なしの真っ平らな壁面で，明るい白色．それだけに壁面・窓面・サッシュ割のプロポーションが決め手である．　ごく細めの水平連続窓が並び，垂直に，これも一層細めの黒い縦線が走る．　窓面は，（天候によって若干変わるかもしれないが）濃いチャコールグレー．　つまり白・黒・灰の無彩色の三段階．　ご承知のようにフランス国旗は赤・青・白の，いわゆるトリコロール（三彩）だが，法政は徹底的に無彩色．　それでいて不思議と両者には共通性がある．　リズミカルというか，動的な感覚がある．　これは写真技法でみられるカラーとモノクローム（特に芸術的な）の関連に似ているかも知れない．　つまり法政のファサードは「黒白のトリコロール」といったところか．　そして瀟洒（シック）という形容詞がピッタリである．

1950年代の大江宏は，徹底的に近代主義的であろうとしたが，後年の彼は「国立観世能楽堂」のような，いわば反近代主義的な

北側前庭からみる相貫体シエルによる教授室棟　photo：H.M.

「幽幻」に魅かれてゆく．　それは千年の昔，平安朝の文化貴族・大江広元以来の直系という彼の「血」のなせる必然かも知れないが，しかし彼の若い時代の作品・法政大学のファサードにも，そのディテールの扱いの典雅さなどに，如何にも貴公子・大江宏らしい個性が随処に現れているのは当然のことかも知れない．今，眼前に見る法政大学校舎の壁面はシミや汚れに傷ついてはいるが，じっと眺めていると，その奥に「花」が漂ってくる．　……何んとしても壊すには忍びない名建築である．

さらに，附け加えておきたいのは，巨大な壁面の前に配置されるシエル工法による低層だが，ユニークな造形の建物である．これは当時，最先端の構法技術だった曲面版を大胆に採用した前衛的な作品であって，建築界の注目を集めたものである．　工学的な課題にも，全く物怖じしないで，ぶつかっていった建築家・大江宏の一面を物語るものである．　今，見ても，巨大で平らな壁面と，曲面版屋根の特異な形態とのコントラストは変化があっていい．　正に知的な均衡である．　「悪くないね……」というのが，私の感想である．

もう一本の超高層棟の追加で……

以上述べてきたところは，現在ある法政大学の建築群にこめられている，いわゆる「箱」以上の価値についてである．　それは戦後の法政大学の「イメージ」を支えてきたが，今も，その「力」を失ってはいない．　この校舎に学んだ学生たちは，意識せずして，この校舎の影響を受けたに違いないし，また，卒業生のプライドの拠所に，この校舎が，それとは意識されずに存在していることは間違いない．

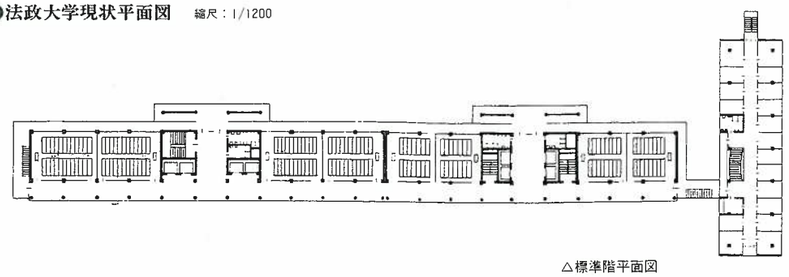
しかし竣工してから，すでに40年経ち，大学の運営の条件はいろいろ変わってきている．　したがって必要最低限の「箱・施設」という意味でも大きな修正が必要になっているのだろう．当面，２つの選択肢があるようである．　一つは大江宏設計の建物群を取り壊して，その場所に全く新しい建物群をつくる，もう一つは大江宏の「名作群」を修理して使い続け，それだけでは足りないところを敷地内の適当な場所に建物――必然的に超高層棟になる――を追加するという考え方．　当然，筆者は後者案・保存と追加の案に賛成する者である．

筆者の友人の一人は，次のような意見を寄せてきたが，全く同感である．　「建築の真の責任は，それに触れる者，使う者の理・知・情を啓発することにあり，教育者は，このことを視野に収めて事に当るべきである．　大江宏の設計になる法政大学の校舎群は，その意味で大江宏の手を離れて名作なのであり，社会の公的財産であるといっても過言だとは思わない．　議論は，このことを踏まえて行われなくてはならない．」

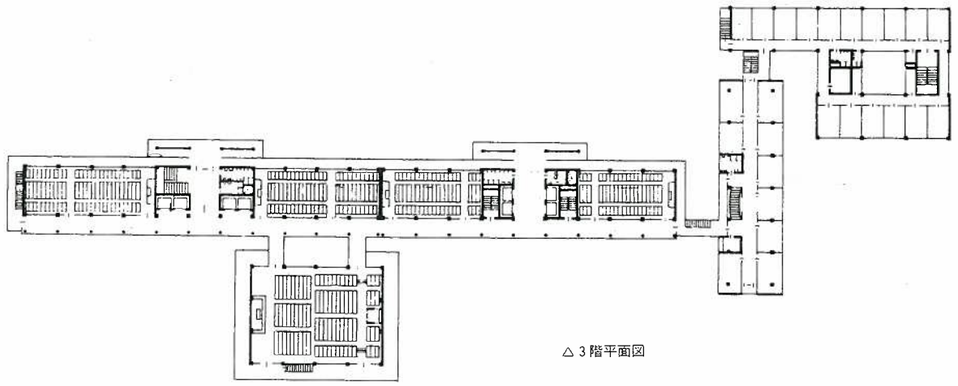
このところ，実は法政大学に限らず戦後初期に建った建築群が方々で取り壊されようとしている．　それぞれ事情がある以上，一概に悪いとはいえないが，しかし一つの時代を画し，その時代の精神を体現しているような「名建築作品群」については，これを深く尊重して，それぞれに相応しい処置が考慮されるべきだろう．　今日，往々にしてみられるスクラップ・アンド・ビルドが「当り前」という考え方は，それ自体，決して「当り前」ではないのである．

はまぐち・りゅういち／建築評論家

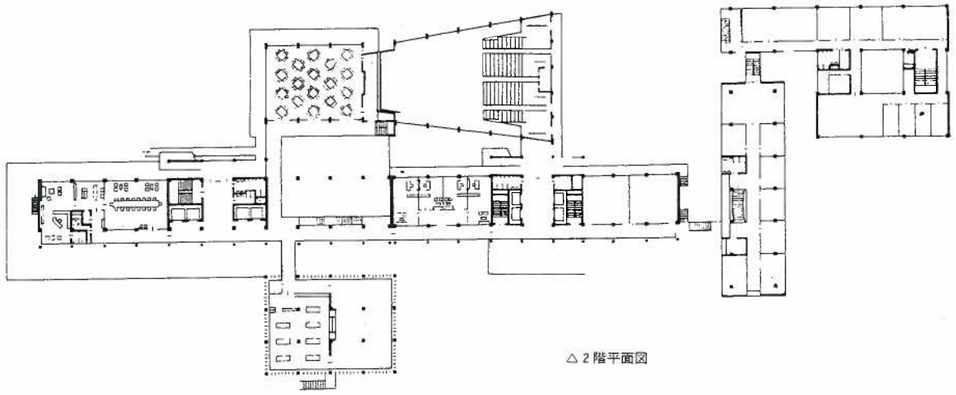
●法政大学現状平面図　縮尺：1/1200



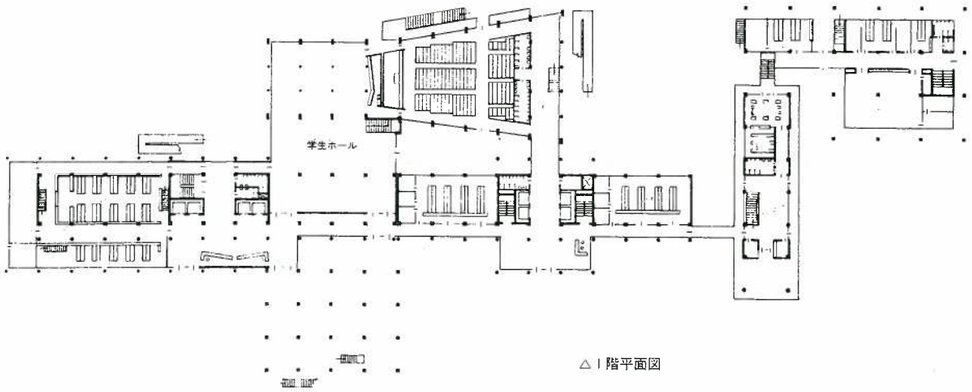
△標準階平面図



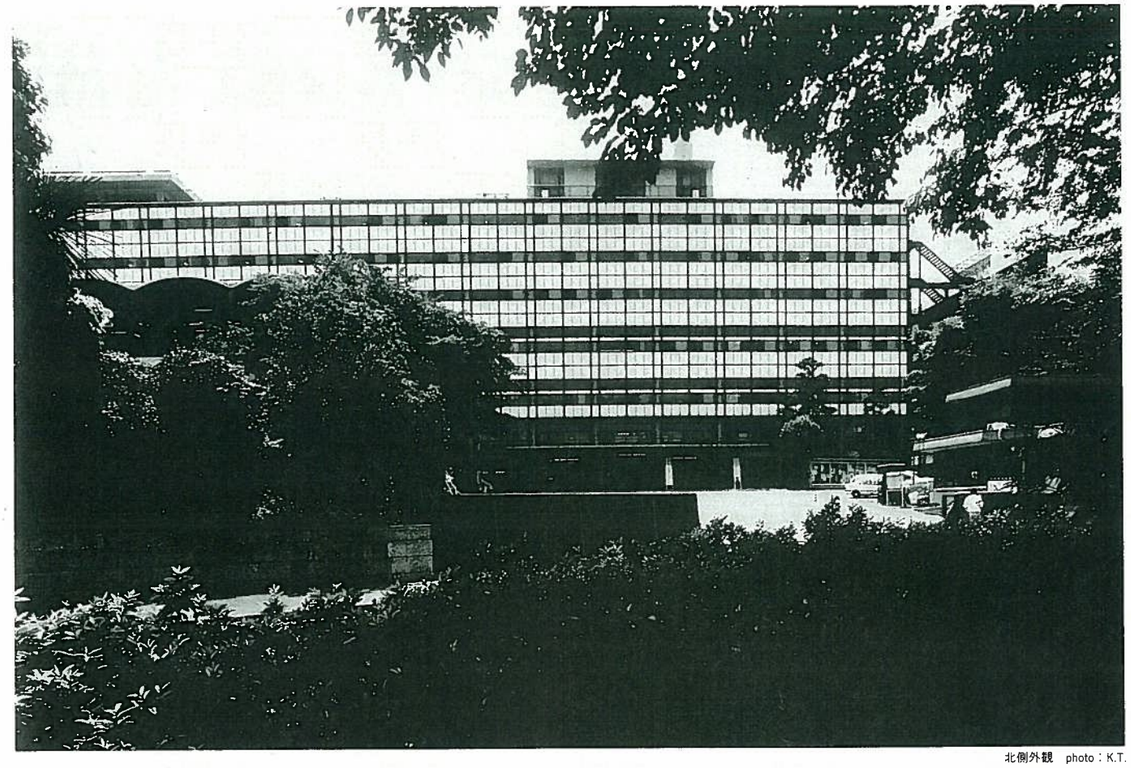
△３階平面図



△２階平面図



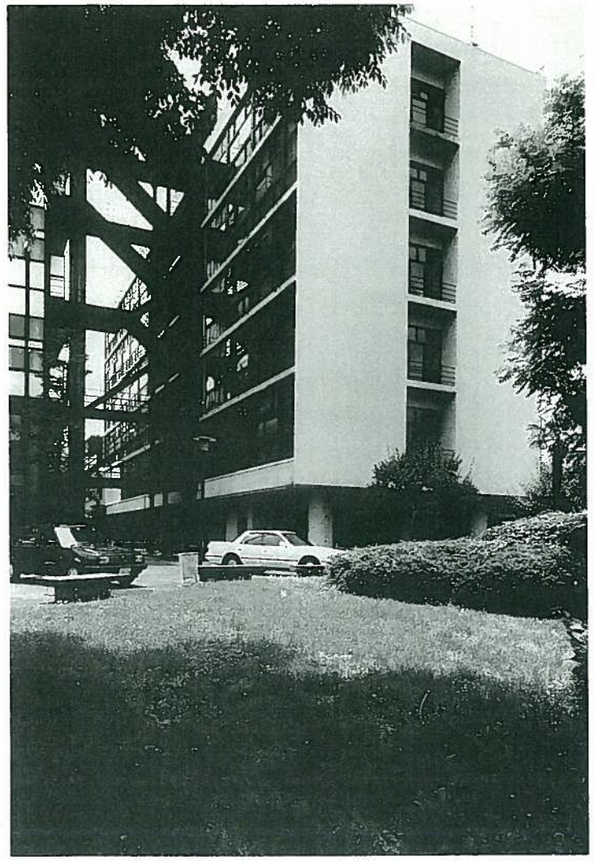
△１階平面図

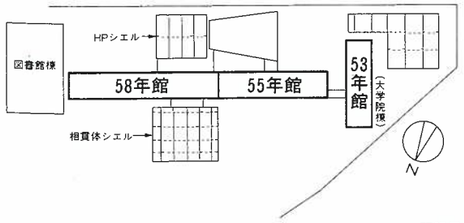


北側外観　photo：K.T.

55年館南側　photo：K.T.

北側よりみる大学院棟（53年館）　photo：K.T.





△配置図